

コロナ禍での都市農村交流を 情報利活用により活性化していく手法

菅野義樹

(kanno yoshiki)

I. はじめに

コロナ禍で人々の交流は自粛、会合や講演会、勉強会のオンライン化が進んでいる。農村に住む私もその恩恵を受け、コロナ以前は都市圏に移動時間をかけて情報を入手していたものが、仕事の合間にオンラインで情報を入手できるようになったのは大きな変化であり、有識者とも比較的簡易に意見交換ができるようになった。コロナ禍に起きた変化を農村も十分に享受できるような仕組みが引き続き求められる。(光回線の整備や農村側に通信インフラを利活用できるスタッフの配置など)

今回はコロナ禍で出来づらくなっている都市・農村交流を知や文化・情報の共有をオンライン上で共有して実際の農産物流通や交流事業の意義を深められないかという提案である。

II. 仮説

農村に興味、関心がある市民は美味しい食べ物や楽しい体験だけでなく、知的好奇心や子供に食育や情操教育としての農村に求める欲求もあるとファームレストランを経営して感じている。農村の知恵や文化・暮らしを年長者や有識者も含めた関係者でオンラインの上で共有化(コモン化)する。共有化の中で農産物の正しい知識、物語を伝える事で農産物の適正な評価、ファン化を促進する。CSAのような市民が農業・農村を支えるといったようなことが促進される可能性がある。知を通じた交流は実際の訪問の意義も深まり都市農村交流はより深い相互理解に繋がるのではないかと考えた。

農村の知は農産物を作って美味しく食べる・加工するや、工夫して住まう・暮らすといった表面的に見えるや、やさしい知から農村の自然から見える、先祖や地域の神様などとの向き合い方などの見えにくい知まで様々あ

る。見えづらい価値にこそ豊かさを見出せる充足した暮らしを見出すこともできる(知るを足る、SDGsのような文脈を農村から感じる)

見えづらい価値はそこに住み、体験する事で漢方薬のようにじわじわ感じる、学んでいくものではあるが、それらに魅力を感じ移住する子育て世代も少なからず農村にいても見えない価値に魅力を感じている一定の生活者もいるのでそれを発信することで農村の深い理解者に情報共有の中でなってもらえる事ができるのではないかと考えている。

III. まとめ

農業・農村の関連人口が人口減少・都市化・産業の効率化によって矯激な減少に繋がっている。農村側は農の応援者を増やしていくためにも農業の多面的な価値も含めた理解・提案を国民に提供していく義務がある。以上のような広義の意味も含め、農村の情報インフラの利活用は推進していくべきと考える。

農的な知は農業産業の効率化・生産性向上の中次第に農村からも忘れつつあるものになっている。人間らしく生きる、暮らすといった社会福祉の視点からは幼児教育から高齢者福祉まで応用が可能な包括性をもったあり様だと考える。それらをより多くの関係者と共有して一人一人が自分らしく生きられる社会を目指す手法にできないかとも考えた。

* 菅野農園

キーワード 農村, 都市, 体験交流, 知の共有, 訪問交流

